

Title	ヒト大腸癌周辺粘膜に多発する微小隆起性病変の免疫組織学的ならびに病理学的研究
Author(s)	王子, 佳宣
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35727
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

[75]

氏名・(本籍)	王 子 桂 宣
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 7500 号
学位授与の日付	昭和62年1月7日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ヒト大腸癌周辺粘膜に多発する微小隆起性病変の免疫組織学的ならびに病理学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 森 武貞 (副査) 教授 鎌田 武信 教授 北村 幸彦

論 文 内 容 の 要 旨

[目 的]

大腸癌の周辺粘膜には微小隆起が高頻度に認められるが、その病理学的意義は不明である。私たちの研究室では、癌胎児性抗原(CEA)と新たに開発した2種類の分化抗原〔腸粘液抗原(IMA)ならびに胃粘液抗原(GMA)〕を指標として、腸上皮を成人型(CEA \ominus , IMA \oplus , GMA \ominus)と胎児型(CEA \oplus , IMA \oplus , GMA \oplus)に区別する新しい分類法を開発し、大腸癌および大部分の大腸腺腫は胎児型上皮で構成されていることを明らかにしてきた。本研究は、同様の手法を用いて、主として大腸癌周辺粘膜にみられる微小隆起上皮の分化度を調べ、その病理学的意義を検討したものである。

[方法ならびに成績]

1. 方法

大腸癌25例および大腸非癌疾患3例の新鮮手術標本と非大腸癌剖検症例10例の大腸粘膜に0.5% indigo carmine液を散布し、実体顕微鏡下に長径5mm以下の微小隆起を検索した。また、176例の大腸内視鏡検査時にindigo carmine液を散布し、微小隆起の発見につとめた。これらの新鮮切除標本は95%冷エタノールまたは緩衝10%ホルマリンにて固定したのち、パラフィン包埋し、連続切片を作成した。この切片に対し、抗CEAモノクローナル抗体と抗IMA抗血清および抗GMA抗血清を用いた酵素抗体法(ABC法)とHE染色を行った。また大腸癌症例では、大腸癌辺縁から微小隆起までの距離を測定した。

2. 成績

1) 大腸癌症例の微小隆起

大腸癌症例25例のうち22例において、その非癌部粘膜に微小隆起が認められ、その数は1症例当たり1-8個(平均3.4個)、計85個であった。腫瘍辺縁より口側に56個(66%)、肛門側に29個(34%)が分布し、うち72個(85%)は腫瘍辺縁より10cm以下の範囲に存在している。肉眼的には、いずれも2-5mmの半球状あるいは扁平な小隆起として認められ、色素散布後の実体顕微鏡下で観察すると、拡張した腺窩の集簇として周囲粘膜と明瞭に区別された。HE染色では、大部分の微小隆起に形態学的異型性は認められなかったが、85個中5個の微小隆起では粘膜の表層に異型上皮が認められ、そのうち2個はmoderate dysplasiaの腺腫で、残り3個は癌と診断された。形態学的に異型の認められなかった80個の微小隆起のうち、74個にCEAが隆起部分の腺腔面に強く検出され、そのうち41個は隆起部分の杯細胞にGMAが検出された。一方、CEA陰性の微小隆起にはGMA陽性の杯細胞はまったく認められなかった。なお、IMAは大腸粘膜のすべての杯細胞に認められた。形態学的異型があった5個の微小隆起ではその異型上皮部分はすべてCEA \oplus 、IMA \oplus 、GMA \oplus の胎児型上皮で構成されていたが、周囲の過形成性腺管にも胎児型上皮が部分的に認められた。

2) 非大腸癌症例の微小隆起

大腸非癌疾患3例の切除大腸には微小隆起は認められなかった。剖検10例の全大腸を検索し、うち4例のS状結腸に微小隆起を認めたが、その数は1症例当たり1-3個(平均0.8個)、計8個であった。大腸内視鏡下に切除された微小隆起は10個(9症例)で、いずれも左側結腸に存在し、他の部分に癌巣を認めなかった。剖検例の8個と内視鏡例の5個の微小隆起には形態学的異型は認められず、いずれも過形成性腺管で構成されていた。この異型性のない13個の微小隆起のうち、10個は成人型上皮から成り立っていたが、内視鏡例の3個の微小隆起では隆起に一致して胎児型上皮が存在した。残りの5個の微小隆起には異型腺管が認められ、4個はmoderate dysplasiaの腺腫で、1個は癌と判定された。なお、腺腫および癌はすべて胎児型上皮で構成されていた。

[総括]

- 1) 大腸癌症例の癌周辺粘膜に微小隆起の発生する頻度は、同年齢層の非大腸癌症例の大腸粘膜に比べて高く(約4倍)、その大半は腫瘍辺縁から10cm以内の粘膜に認められた。
- 2) 微小隆起の多くは形態学的異型のない過形成性結節であったが、大腸癌症例(25例)の非癌部粘膜に検出された過形成性結節80個中41個は胎児型腸上皮で構成され、成人型腸上皮よりなるものは6個すぎなかった(残りは中間型)。
一方、非大腸癌症例(剖検10例、穿孔例3例、内視鏡例176例)に検出された13個の過形成性結節では、3個のみが胎児型腸上皮であった。
- 3) 大腸癌症例の微小隆起には腺腫2個、癌3個が検出され、また非大腸癌症例では腺腫4個、癌1個が検出されたが、これらはいずれも胎児型上皮で構成されていた。

論文の審査結果の要旨

本研究は、大腸粘膜（とくに大腸癌周辺粘膜）にみとめられる径5 mm以下の微小隆起を対象として、その病理学的意義を検討したものである。癌胎児抗原（CEA）、腸粘液抗原（IMA）ならびに胃粘液抗原（GMA）を指標として大腸粘膜上皮を免疫組織学的に成人型と胎児型に分類すると、癌巣を含む微小隆起はすべて胎児型上皮よりなり、微小腺腫の多くもまた胎児型上皮であることを明らかにした。また、過形成性微小隆起の多くは成人型上皮であったが、大腸癌周辺粘膜では胎児型のものも少なからず存在した。これらの所見は大腸癌の発生を考察する上で重要であり、学位に値する。